

グループワーク 「プライバシーの共感材料さがし①」

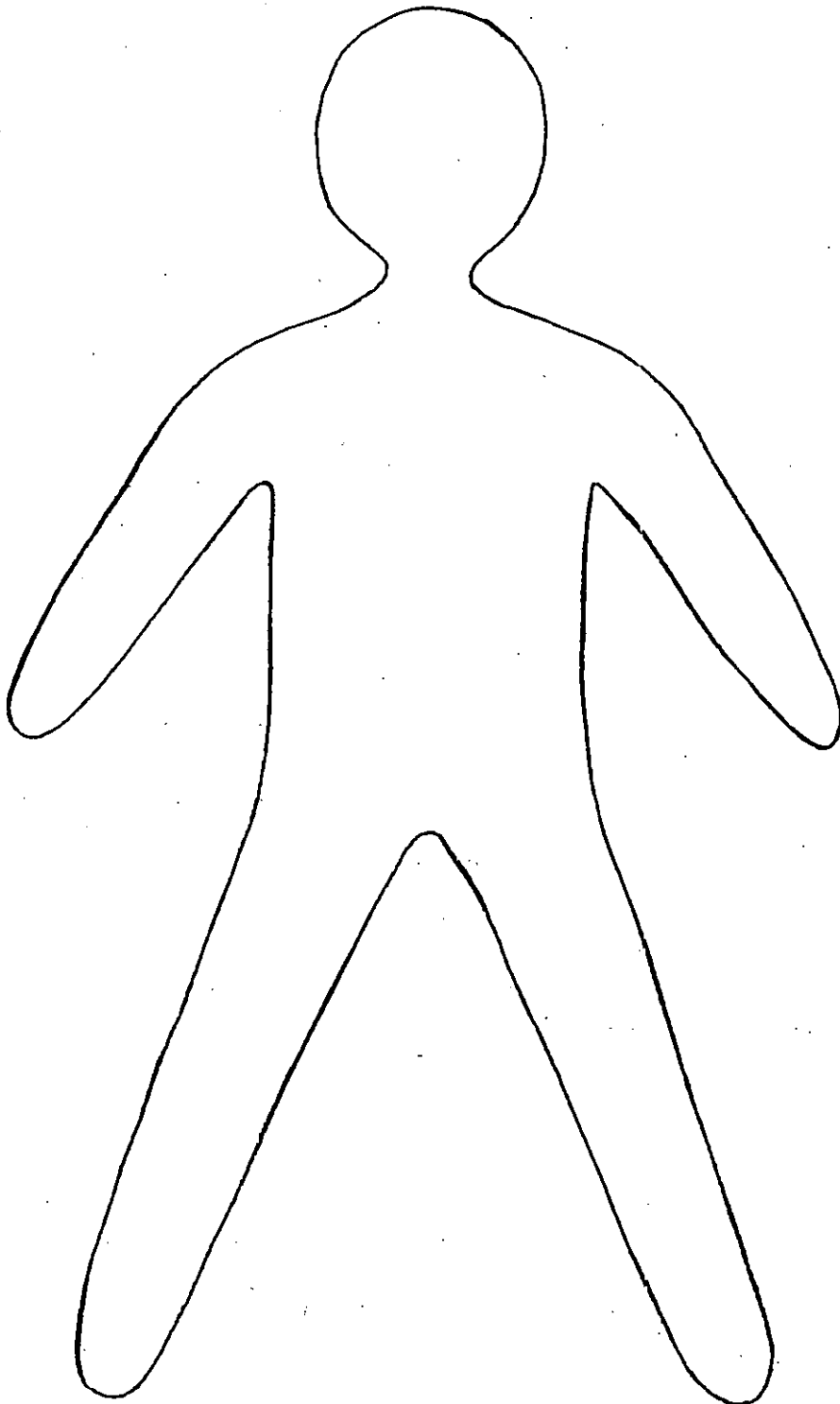
どんなこと・どんなものがプライバシーにあたるでしょうか。いろいろな場合を想像して、グループで話し合ってみましょう。

セルフワーク 「心の中の AIDS イメージ」

あなたは AIDS についてどんなイメージを持っていますか？ はじめて AIDS という言葉と出会ったとき、どんな印象をもちましたか？ それはいつですか？ また、今はどうですか？

セルフワーク 「心の中の感染者イメージ」

あなたはHIV感染者やAIDS患者についてどんなイメージを持っていますか？ 人型に書き込んでみましょう。



1. プライバシーの基本原則

考えて見よう! どうして、HIV 感染者や AIDS 患者のプライバシーを守ることが重要なのでしょうか？

●人の心の中に、あるいは社会の中に、HIV や AIDS に対する恐怖や誤解や偏見があるから（→あなたの AIDS イメージはどうでしたか？）

●AIDS と共に生きる人々（HIV 感染者や AIDS 患者）に対して、不利益な結果をもたらすから（→10ページコラム参照）

●誰もが秘密を守ることができるとは限らないから（→10ページ図参照）

●実際問題として、プライバシーとなるものは人によって違うから（→例、名前・国籍・セクシュアリティ・家族のこと・・・）

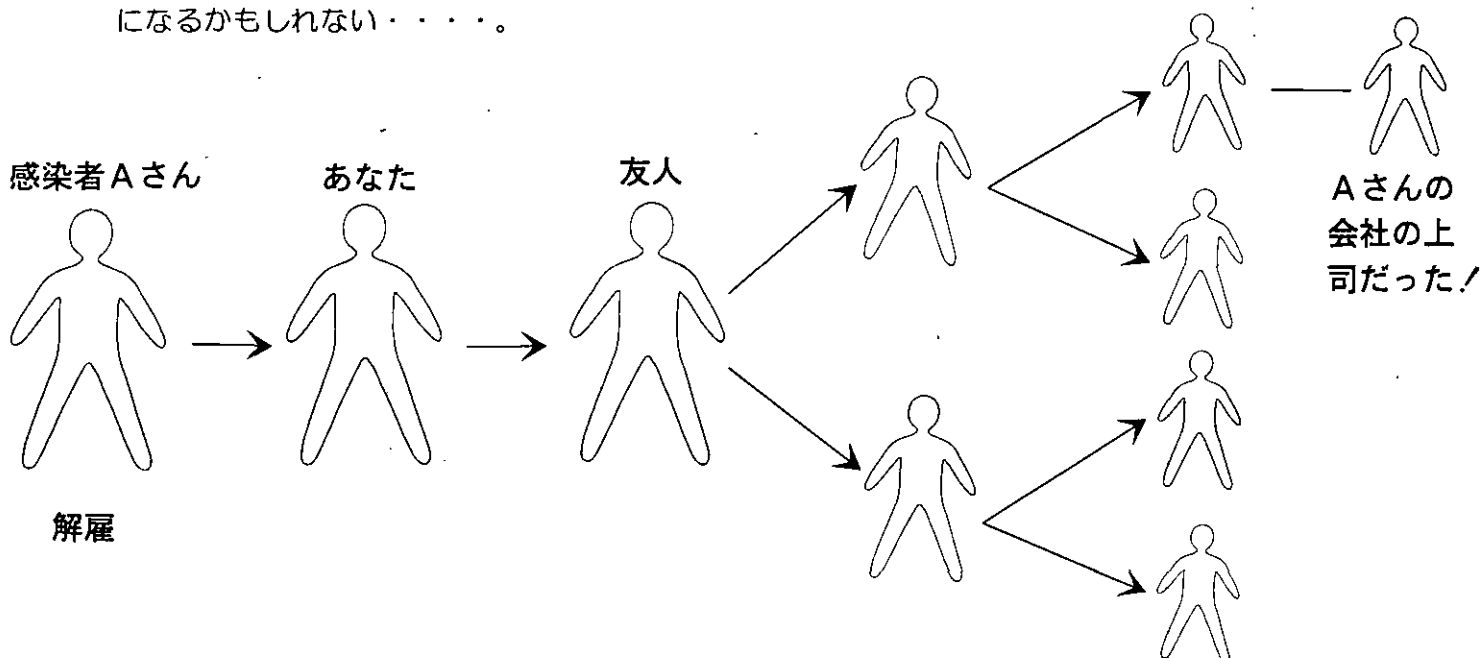
●プライバシーを守ることで信頼が増し、人間関係がスムーズになり、活動やサポートが円滑にすすむから

プライバシーの基本原則

個人や組織に関する情報は、基本的に当事者のものです。
その情報を取り扱うときの権限は本人にあります。

誰もが秘密を守ることができるとは限らない

あなたが「ここだけの話・・・」と友人に打ち明けた秘密が、めぐりめぐって、とんでもないことになるかもしれない・・・。



コラム 差別が社会的生命を脅かし、生命をも危険にさらすことがある

<例1>

HIV感染者であることを理由に診療拒否にあった人が、さらなる差別を恐れて2度と病院に行くことができなくなりました。その結果、病状が悪化して生命を危険にさらすことになりました。

<例2>

1987年1月17日に始まる「神戸パニック」報道により、AIDS患者の実名や写真が明らかにされました。患者は3日後に亡くなり、過去に通っていた病院が廃院になりました。

<例3>

HIVと人権・情報センター東京支部設立メンバーは、地下鉄のプラットホームから突き落とされ、複雑骨折しました。もとの病気も悪化し、その年のうちに亡くなりました。

<例4>

ナチスの夜と霧作戦によって、統合失調症の人たちが虐殺されました。〈遺伝による〉という誤った情報のもと、親族たちも虐殺されました。

2. “伝える必要性” について

考えて見よう! プライバシーに配慮して情報を伝えるときに、大切なことは
なんでしょうか？

●ある人のプライバシーを別の人に伝えるときは、前もって必ず前者の了解を得る必要があります

●ある人のプライバシーを別の人に伝えるときは、その必要性が明確に説明できて、また前者の利益となると分かっていることが重要です(→秘密を明かすことの正当性が認められる場合も、人権への配慮を怠ってはなりません。もし人権が侵害されるような情報の伝達であれば、その正当性は失われるでしょう)

●情報を伝える人物は、伝えられる側が「プライバシーの基本原則」(→10ページ)を理解し、守ることができるということを確認する必要があります

●情報を知らされる人の数は、できる限り最小限にとどめることが大切です

●当人が自分のプライバシーを他人にさらすことなしに、必要とする情報やサポートにアクセスできるよう、まず努めることが大切です。

●それが誰であるかを明かさずに、一般的な話として情報を伝えることができないかどうか、いつでも考慮する必要があります

報道によって作られた AIDS イメージ

資料 1

資料 1～5 出典 解放出版社「AIDS をどう教えるか」

日本人 AIDS 患者第 1 号

1985 年、アメリカから輸入した血液製剤で HIV に感染し亡くなった血友病患者がいたにもかかわらず、国はそれをかくすために、日本での最初の感染者を“男性同性愛者”と発表し、マスコミはそれを報道した。

⇒AIDS は“一部の人”“特別な人”のかかる病気であるというイメージが作られました。

資料 2

松本事件

1986年11月3日、「フィリピンから出稼ぎに来ていた21歳の女性が、日本に来る前に受けていたHIV抗体検査で陽性と出た」というニュースが流れました。そしてこの女性が実名で報道され、2日後には松本市内で働いていたことが伝えられました。そうするとマスコミは松本市内に押しかけ、女性が働いていた店や、客となった男性などを探しました。とても大騒ぎになり、女性の客とウワサされた人が村八分になったり、松本市内に住んでいる外国人女性たちが銭湯、スーパー、レストランなどに入ることを断られたりするようになりました。

また、松本市民だということだけで他地域での宿泊を断られたり、松本ナンバーの車が走ると逃げ出す人すら現れる、などのパニックが起きました。

⇒それまで遠い存在だった AIDS が突然身近な恐怖となりました。

資料 3

神戸事件

1987年1月17日、厚生省は「神戸市で初めて日本人女性のAIDS患者が確認された」と発表しました。次の日、新聞の見出しやテレビのワイドショーで、大々的に報道されました。この女性が発表の3日後に亡くなると、マスコミは神戸におしよせました。なかでも多くの週刊誌は女性患者をつきとめ、この女性の実名や写真を掲載しました。そして病院や外国人相手の歓楽街へ行き、この女性と親しかった男性や“客”の男性を探すために必死になりました。さらにこの女性の葬式にまでおしよせ、報道しました。この騒ぎで不安になった人たちが、AIDS電話相談をしたり保健所のHIV検査に殺到しました。

⇒この女性の通っていた病院は廃院となり、現在も再開されていない。

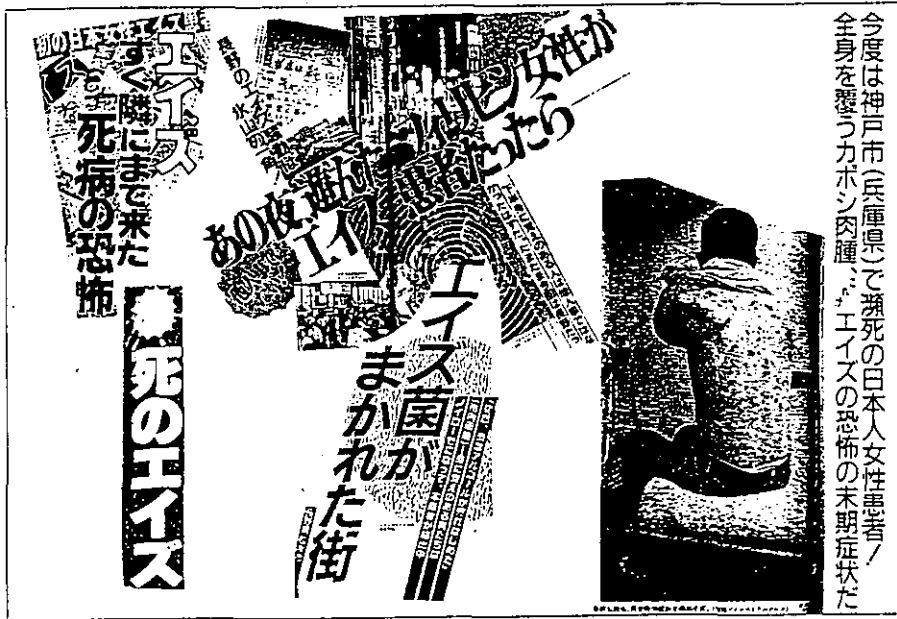
資料 4

高知事件

1987年、「高知県で HIV に感染した女性が妊娠し、まもなく出産する」というニュースが流れました。

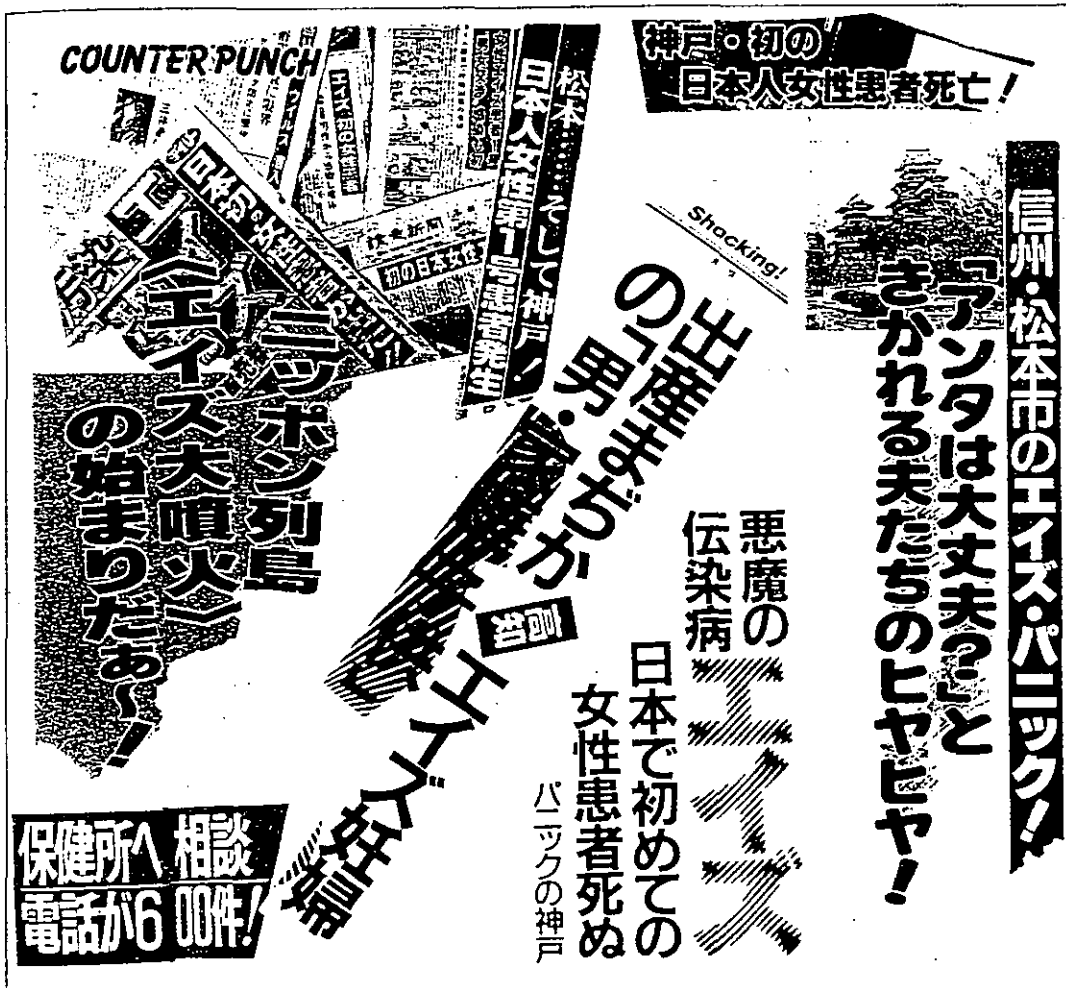
高知では“神戸事件”のように、AIDS 患者の写真や実名、地方を出すことはありませんでしたが、この女性はかなりくわしいプライバシーの情報が、マスコミを通じて報道されました。またこの女性が以前、血友病の男性との交際がありそのときに HIV 感染したこと、女性の感染者から性行為によって HIV/AIDS が広がっていく怖さが強調されました。

⇒連日メディアでは、この女性が子供を産むことの是非が議論されました。



まちがったイメージをつくった報道の一部

今度は神戸市(兵庫県)で強死の日本人女性患者！
全身を覆うカボシ肉腫、エイズの恐怖の末期症状だ



まちがったイメージをつくったマスコミ報道の一部

「HIV と人権・情報センター」の名前の由来

なぜ「ジンケン・ジョウホウ」か？

1986年から1987年にかけての「AIDSパニック」。

HIV と人権・情報センターは、その翌年に屋鋪恭一氏の呼びかけによって大阪で設立されました。

センターの名前には、HIV に関する正しい「情報」を伝えるようという思いと、それにも増して、個人の情報はその人自身のものであり、正しい情報である前に「人権」が守られなければならない、「情報」と「人権」がリンクしつつ、「人権」が「情報」の上位にあらねばならない、という思いがこめられています。

情報の漏洩



感染者のプライバシーと人権を無視した報道



感染者、女性、外国人、同性愛者への人権侵害



HIV/AIDS のまちがったイメージ



偏見・差別

3. “知る必要性” について

考えて見よう! たとえば、周囲の誰が HIV に感染しているかを知る必要性があるのでしょうか？

- HIVに感染している人の多くは自分で気づいていません。私たちの周囲の誰が感染していて、誰が感染していないのかを、はっきりと知る方法はそもそもないのです。
- 感染経路ははっきりしており、日常の生活場面や職場における感染の可能性はほとんどありません。また、私たちは感染から身を守るための具体的な方法について知っていて、それを一人一人が行うことができます。
- 必要なのは、誰もが HIV 感染者や AIDS 患者でありうると想定して、あらかじめ対応する（Universal Precaution）ことです。

Universal Precaution (ユニバーサル・プレカウション)

相手が HIV 感染者であるとわかっているときにだけ、特別な対応や対策を施すのではなく、すべての人を感染者・患者と想定して対応し、行動することが大切です。

<例1> 医療現場で

医療従事者が、HIV 感染が明らかな人の血液だけ管理に気を使う、という場合を考えてみましょう。感染者の多くは自分が感染していることに気づいていません。そのような人が患者としてくるケースが考えられます。また、たとえ患者全員に AIDS 検査を行ったとしても、ウィンドウ・ピリオドということもありえます。

<例2> 職場やボランティア活動の場で

風邪をひいて咳が出ているときに、ボランティアの事務所を訪れました。抵抗力の落ちている感染者と知らず出会っているかもしれません。

※ウィンドウ・ピリオド=感染してから検査で HIV 陽性と判明するまでの期間。検査方法によって異なる。つまり、検査では陽性と出ないが感染性のある時期が存在するという事。

考えて見よう! たとえば、HIV 感染者や AIDS 患者の情報について知る必要性があるのはどんな場合でしょうか？

●感染者・患者のサポートにかかわる人が、感染者・患者本人にとって利益となり、かつ本人が必要とするサポートを行う上で、ある程度の情報が必要とされるとき（例、身体障害者手帳や医療費助成の申請を代行するなど）

●医療従事者が、患者の治療のために必要とする場合。このようなときでも、インフォームドコンセントは欠かせない。

インフォームドコンセント（十分な説明と同意）

十分な説明と情報が与えられてはじめて、同意を得るための条件が整ったと言えます。インフォームドコンセントを行う上では、以下のことを考える必要があります。

☆なぜ 情報を知らせなければならないのだろう

☆誰が 特に知らされる必要があるのだろう

☆誰が 知らせる必要があるのだろう

☆どこでどんなふうに 知らせたらいいのだろう？

☆なにをどこまで 知らせたらいいのだろう？

☆どこで どんなふうに 情報を記録し、
誰が それに触れる可能性があるのだろう

☆何が 情報を明らかにすることによって、生じるのだろう

<例>HIV抗体検査を行う場合

1998年5月、信濃毎日新聞が「エイズ感染連鎖」の記事を掲載

1998年 5月26日 信濃毎日新聞

県内エイズ感染連鎖

外国2女性陽性

患者男性患者
死亡で浮き彫り

接触した日本人男性は…

県内のある総合病院で三月初め、エイズを発症したタイ人男性が当時、同病棟にいた別の男性と接触したことが二十五日、医師関係者の話で分かった。県内では三月末までに患者累計二十四人、感染者累計百三十四人が報告され、感染はさらに広がっているが、こうした感染連鎖は、

「連鎖」の連鎖が具体的に浮き彫りされた例は過去にほかにない。

医師関係者の話を総合すると、タイ人男性Aさんは二月半ば、県内の友人宅を訪れたが、数日後から四〇度以上の発熱が続き、せき

間ほど働いた。この間、四代目のスナックで働く二十代のタイ人女性Bさんと同じ飲食店で働いていた当時、Bさんは、県内の飲食店で働いていたという県内は多数の女性と性関係を持っていたという。

検査をしたところ、HIV（エイズウイルス）陽性と分かった。既に肺炎は末期症状で、入院から十日間ほどで死亡した。

タイ東北部出身のAさんは五年ほど前、観光ビザで来日。関東地方で働いた後、県内に移り、外国人女性らを対象にした飲食店で二年

病して初めてエイズと気付くケースが多く、その間の感染の広がりはおおまかだ。最近では検査、相談件数が増えるなどエイズ問題への関心が低下して取り、危険

信濃毎日新聞の記事は 何のために、誰にとって、知る必要のある情報か

①個人のプライバシーの暴露である

- ◇出身地 ピザの種類 勤めていた店の種類 何年いたか
- ◇どこに誰と住んでいたか どんな人と交際していたか
- ◇総合病院に入院していた

②複数の医療関係者からの取材によっている

- ◇なぜ医療関係者が上記のことを知る必要があったのか。
→患者の治療に必要な情報のみを知ればよい。
- ◇患者は死亡しているが、情報公開について本人の了解を得ているのか。

③「連鎖」という表現によってまちがったイメージをいだかせる

- ◇人間関係の図式を作り、「外国人から感染が広がっている」という結論にたどりつかせる。
- ◇HIV の遺伝子を確認しなければ、誰から感染したかはわからない。その証明がなければ、根拠のない憶測でしかない。
- ◇「連鎖」という表現は、100%感染するかのような印象を与え、過剰な恐怖をあおる。